自己点検・評価体制が成功する五つのポイント

自己点検・評価委員会
実施作業部会責任者
吉森　護

▼いろいろ曲折があったが、本学においても自己点検・評価の体制がなんとか始動し、その報告書の第一報「新しい大学像をめざして」を上刊することができた。実施にあたった者として、その出来栄えはともかく、ほとんど徒手空拳で臨まなければならなかっただけに、ホットしている。その過程をふり返ってみて、かなり強引に実施したこともあって、あれでよかったのか、別の方法があったのではないかとの思いがめぐる。

▼今回の具体的実践に際して直面したいくつかの問題を踏まえて、本学において、今後、自己点検・評価体制が定着し、成功する（教育・研究はもちろん管理運営の活性化・水準の向上に有効に機能する）カギとなるポイントを五点にしぼって記してみたい。

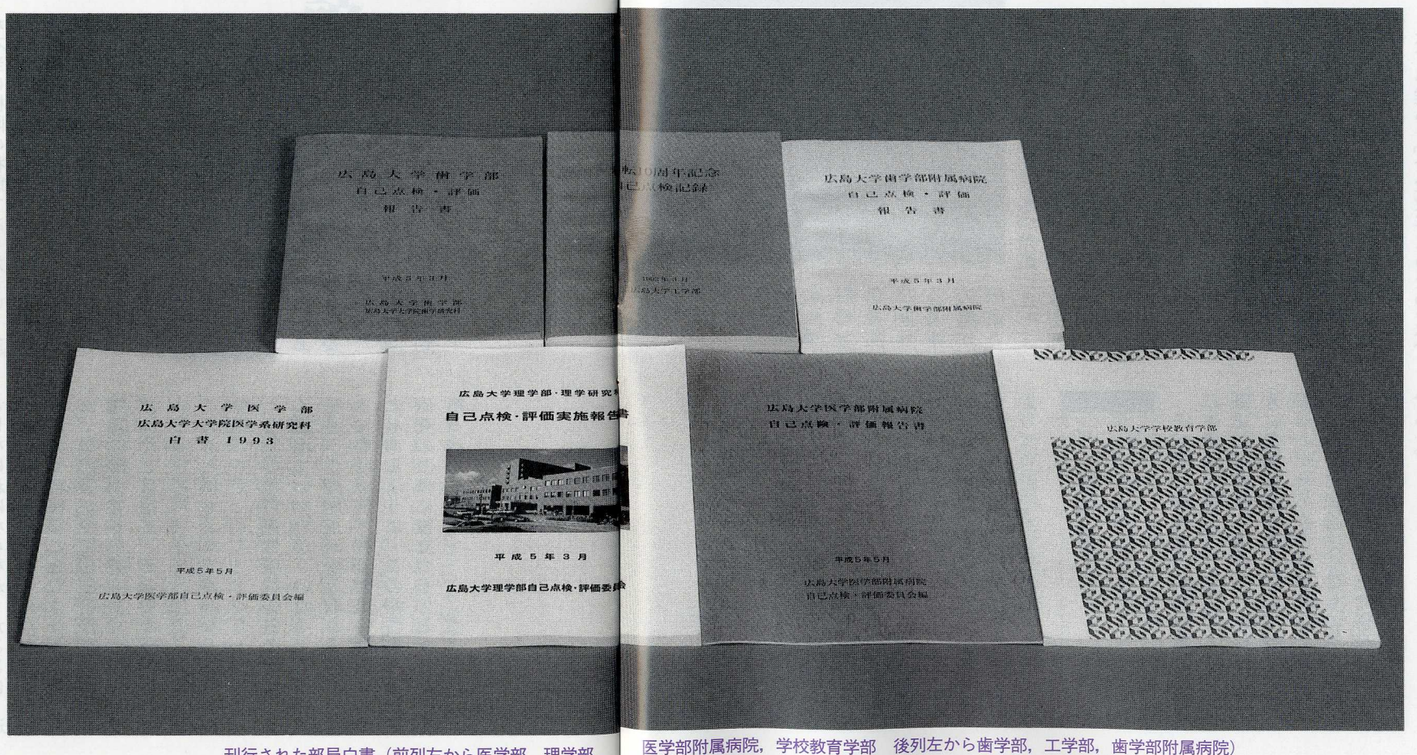
▼第一は、構成員の理解と合意。「自己」点検・評価の成功は当事者、つまり、学生を含むすべての構成員の自覚と理解がないと絶対不可能。これまで、学内でたいして論議がなされたようには思い当たらない。今回の実施では、大学（院）設置基準に盛りこまれたから、概算要求のために仕方がない、といった程度の認識が多かったのではないか。大学の生き残り策であるとの大学人としての責任感と自覚が必要。

▼第二は、学長のリーダーシップと迅速な対応。自己点検・評価体制は、自治を標榜する大学の運営の基本的手段。構成員が部局や学科等のエゴにはしらず、大学全体をよくする意欲をもち、それを統括する学長のリーダーシップが必要条件。学長を責任者とする体制にすべきであろう。改革を進める「基本整備委員会」（仮称）の設置も必要。対応を伴わない自己点検・評価は、全く無意味、時間の浪費。

▼第三は、点検・評価項目の体系化。多くの問題は構造的である。組織と個人ごとに、組織については全学レベル、学部レベル、さらにその下位単位のレベルごとに項目を区分けし、それぞれ体系的にあたるべき。特別委員会が答申した項目は十三。出来るだけ早くそのすべてにわたって、定期的に点検・評価する体制にすべき。

▼第四は、報告書のあり方。点検・評価の仕方が甘ければ、単なる「大学案内」になる。構成員が自己を厳しくみつめ、自ら顔を赤らめる部分も積極的に摘出すべきだ。しかも、簡潔に。大学人のレポートは、一般的に、冗長に過ぎる。自己満足、自己宣伝は不要。

▼最後は、自己点検・評価委員会の能力向上。膨大な作業を伴うだけに委員会、特に一部の委員の負担は大きい。委員会をサポートする「調査室」のような専属事務体制の整備が必要。



刊行された部局白書（前列左から医学部，理学部，医学部附属病院，学校教育学部　後列左から歯学部，工学部，歯学部附属病院）

白書の刊行を終えて
―今後の具体化に注目する

自己点検・評価委員会
白書作業部会責任者
藤原健藏

この度の「広島大学白書」の刊行は、時期的に大学設置基準等の改正（大綱化）に対応した形になったが、本委員会としては同書の田中前学長の発刊の辞ならびに第Ⅰ部（理念とあゆみ）に明記してあるように、森戸初代学長の建学の理念に即して絶えざる自己変革を行ってきた「運動」の点検作業と位置づけて実施してきた。

自己点検・評価は「概算要求のためにぜひ必要」といった要請が評議会の席上であったのは確かであるが、この作業をそのように便宜的に矮小化すべきでないことは、すでに特別委員会答申で述べられていた。本委員会では、この特別委員会答申の精神に沿って実施要項をつくり、平成五年一月に評議会・各種委員会並びに部局等に対して、その「管理・運営」の見直しをそれぞれの理念・目標・将来構想に照らして実施するよう依頼した。

点検・評価の依頼からその結果の回答までの期間が二ヶ月と短く、かつ年度末の繁忙期であったにもかかわらず、部局・委員会等からは期限までにそれぞれの回答を寄せて頂いた。この点はお詫びと感謝を致したい。しかし時間がないために、十分な部内検討を経ないまま提出せざるを得なかった部局・委員会等もあったと聞く。事実、そのまま公表するのは如何かと思われる内容・表現もあったが、それらの箇所については本委員会から指摘して微調整して頂いた。

とは言え、点検・評価主体である部局・委員会等の論議に十分な時間を割けなかったことは、せっかくの点検・評価作業を全構成員（単位）の改革・改善への意識高揚につなげる可能性を少なくしたと言う点で、反省したい。また、特定の委員や担当者に大きな負担をかけたことは、今後の検討課題となろう。

白書では、将来構想検討委員会答申「二十一世紀に向けての広島大学のあり方」をもって第三の変革期に入ったとしている。同答申は当時の学長の諮問に答えたものであったが、それが広島大学の運営に具体的に反映された形跡はない。そのことへの反省（評議会の）は白書の七ページに指摘されている。もし同答申の何分の一かが生かされていたならば、この白書の内容も相当変わっていたに違いない。白書の刊行作業をしながら、非常に残念に思ったことである。

そのような最近の事例から考えてみても、この白書が原田新学長をはじめ部局長、評議会等によってどのように読まれ、どのような形で具体化されていくかを注目していきたい。

「漬物石」のように重いこの白書が、その重量だけでなく、その内容においても広島大学の整備充実のために活用されていくことを切に望みたい。